

高山

高山の原生林を守る会

会報 第 33 号

2000 年 7 月



雪ウサギ観察会

福島市民には「種まき兔」として親しまれている吾妻小富士の雪形「雪ウサギ」を間近に見ようということで、去る4月23日、残雪の吾妻小富士山麓を目差しました。

まだ営業が始まっていない微温湯温泉から、登山道を吾妻小富士の裾野を目差して登ること約2時間。出発時は晴れていたのに、森林限界に達した頃、天気予報通り寒冷前線がやってきて横殴りの風雪模様になってしまいました。高橋代表が上部の偵察に出るなど様子を見ていたものの、肝心の吾妻小富士も見えず、風も強くなり回復する気配もないのであきらめて引き返し始めました。

ところが、10分程下ったところで吾妻小富士が見えだし、天候回復の兆しが見えてきました。寒冷前線が通過したようで、急遽登り返し、雪ウサギが正面によく見える雪の丘まで上がりました。

丘の上からは、これまで麓からしか見たことのない雪ウサギが目の前に広がり、その大きさを実感することができました。そして、雪ウサギを眺めながらお昼を頂き、下山するころにはまた雪が舞い始めました。

「雪ウサギをみんなに見てもらいたい」今回の観察会を発案した高橋代表の願いが通じたのか、本当に絶妙なタイミングで雪ウサギに会うことができ、印象深い観察会になりました。

雪ウサギ観察会に参加して 伊藤順子

咲こうか咲くまいか、時ならぬ寒さに首をすくめているような R115 の桜並木。天気は下り坂と言う予報だけれど、車移動の途中、立派に目的の雪ウサギが望めて、ひとまず満足。数年前、微湯の送迎マイクロバスでワクワクドキドキしながら通った素晴らしい(?)山道が、立派な舗装道路になってしまって、運転は楽だけれど、何だか自然が遠くよそよそしくなった気がしてちょっと悲しい。それでも、芽吹き of 山道は、一瞬一瞬が名画のように美しく、思わずうっとり。(と、いけない。安全運転、安全運転。)

冬の眠りから覚めたらしい微湯の登山口から、一路雪ウサギを目指す。雪道の歩き方、特に雪解けの頃の落とし穴(?)の位置を教わって「なるほど♪」。観察会の度に、何かひとつずつ利口に(?)なるのが嬉しい。もうひとつ今日の目玉は、「ショウジョウバカマの秘密」。それから「なぜ、立ち木の周りから雪が解けるか?」 etc. etc. そんな観察をしながら、小一時間ぐらい登り詰めた頃 急に雪が吹きかけてきた。一転俄かに掻き曇りの世界になってしまった。高橋さんが雪ウサギの様子を見に行ったら、ガスがでえないので諦めて下り始めて数分かつ十分、また日が差してきた。小富士が姿を現した。



イソツツジの冬芽はまだ固かった
美しさ。「大切にせねば」と思いつつ下山した。

登り返しはつらいけれど、老体に鞭打って引き返す。スキーですいすい降りられた方はいそれ以上にお疲れさま。でも苦勞した甲斐が200%以上。標高約1300m程のピークからの吾妻の眺望は、雪ウサギはさておき、ただ、ただ、素晴らしいの一言。特に高山の男沼・仁田沼方面に延びた裾野の木々を纏った

ブナの新緑観察会に参加して 村松恵美子

「ウワーッ 大きなブナの木!!」思わず歓声をあげていました。会報の表紙を飾ったこともあるというこのブナは三人が両手を広げてもまだ抱えきれません。

六月初旬、中吾妻山ブナの新緑観察会に参加しました。私にとっては、丁度十回目の参加となります。登山口からは、四、五人づつのグループに分かれ出発です。木や花、虫、登山の話題等、リーダーとの会話は尽きません。足もとにはミヤマスマシ、ズダヤクシュ、ベニバナイチヤクソウ等が見られ、林はスギからカラマツそしてブナへと変わって来ました。

昼食後、背丈以上もある笹をかき分けかき分けブナの大木に会いに行きました。樹齢数百年のそのブナを見上げ、しばし敬虔な思いにとらわれました。苔むした木肌に新緑の葉を着けた枝をいっぱいに広げているブナ。今年は花も沢山咲いていました。ブナの森は人の心を癒してくれる空間、癒しの森でもあるように思いました。優しさと威厳のあるブナが、今まで以上に好きになった観察会でした。



中吾妻のブナ



ラショウモンカズラ



トリガタハンショウズル

今まで吾妻連峰での植生確認報告の無い植物。高知県の鳥形山が原産。恐らく今回の観察会参加者が吾妻での初確認者。渡り鳥が種子を運んだのではないかとされる。

馬場谷地問題中間報告

去る5月21日(日)、東北森林管理局置賜森林管理署において、「西吾妻の歩道整備に関するモニタリング調査中間報告の説明会」が開催された。説明会では「吾妻の森と緑のトラスト運動」の高橋敬一弁護士、「吾妻の自然研究会」金子満氏始め約20名の市民の出席があった。「高山の原生林を守る会」からは高橋代表と佐藤の2名が説明会に出席した。会議に先立ち、朝早く福島を出発して現地調査をした。ルートの大半はまだ残雪が2mほど残っており、実態を十分に把握できなかったが、伐採樹の撤去、ルートの誘導ロープ設置、植生回復モニタリング調査枠の設置、馬場谷地を迂回する新ルートの設定等を確認することができた。モニタリング調査結果は、登山道回復と湿原回復の2つに区分して説明された。

登山道周辺の植生変化調査について(山形大学齋藤員郎教授)

自然保護上の問題

1. ハイカーによる掘込み、拡幅個所のぬかるみ、段差の大きい階段を回避行為による周辺植生の破壊。
2. 切土、盛土による表土流出による植生回復遅延及び表面浸食の進行。
3. 重機誘導路跡地への登山者踏み入れによる植生回復能の欠如。
4. 大量の伐採枝条の堆積放置による植生回復遅延。

植生回復調査の方針と概要

1. この地域が自然植生域であることを考慮して移植や播種などの人為的な方策に拠ることなく二次遷移にゆだねた植生回復策とする。
2. 植生回復を記録し、損傷を受けた植生の再生を図るための自然環境の基礎資料として今後の保全に資する。
3. 10箇所を抽出しモニタリング調査。うち2箇所で、50cm四方の固定方形区を設定し、5cm四方の格子区分により、出現植生を記録。また3地点で5m四方の区画を4個連結した永久調査枠を設置。
4. 現在のところ、ササの侵入は見られない。再生植物はミヤマカンスゲのみ。カエデ、アカミノイヌツゲ等で切り株からの萌芽が認められる。

馬場谷地湿原の調査について(福島大学榎村利通名誉教授)

植生回復調査の方針と概要

1. 学術的な馬場谷地湿原の定義を明確にするため湿原を西湿原、北東湿原、中湿原、南湿原に区分して22箇所にエビプロメーターを設置し、深さ25cmと50cmの地下水位(水圧)の変動を測定した。
2. 馬場谷地は分布境界型ブランケット湿原と定義される。これは日本では一般的な湿原である。丸太が埋設された歩道で地下水が集積している傾向が認められるが、工事の影響を明確にするまでには至らなかった。次年度は地下水のECとpHの測定も実施していきたい。これは水源を明らかにすることが目的である。

今回の説明会では、いくつかの問題点が浮き彫りになった。まず調査期間が短い上に、学術的調査に偏重しているくらいがある。特に湿原の地下水位調査では、丸太埋設されている箇所が2箇所しか設定されていないのはどう考えても今回のモニタリングの目的に反している。本来ならば丸太埋設区に沿った地点を重点的に測定すべきではないか。また現地では森林管理局が設置したと思われるプレートが幾つかあるが、一般的な啓蒙プレートのみで今回の経緯を説明したものは皆無。事実を明らかにしたものがなければ登山者の協力は得られないだろう。中間報告書の議事録を見ると、今回の説明会は、高橋氏らの要請によるもので当初予定されていなかったこと。新ルートでは、展望を確保するための方策が当たり前のように討議されていることなど、今回の問題を発生させた主因について、まだ理解していない関係者がいるように思える。調査期間中は登山道を閉鎖し、この山域のブナ等の実生植栽や、湿原植生植物の採種・播種等による積極的な回復実験を部分的に展開することや調査期間の延長(最低10ヵ年)を考慮すべきではないだろうか。(文責 佐藤 守)



吾妻山サミットの報告

「吾妻山の自然を未来に引き継ごう」そんな目的で吾妻山サミットが6月13日、福島市で開催されました。福島県が主催ということもあり、知事、市長と行政機関のトップが参加し、とりわけ知事は後半のデスクッションにもパネラーとして意見等を述べておりました。サミット全体の印象としては観光PR的要素が強く、今後の活動についてもトレッキングやコンサートそしてシンボルマークの公募など吾妻山の現状を的確に把握しているとは言いがたい内容ばかりです。そんな中、今後具体的活動を引継ぎ、推進する「ロマンチック吾妻協議会」の二階堂会長の言われた、吾妻山では磐梯山周辺のようなスキー場開発はすべきで無いとの言葉が唯一の救いのように思えました。当会としても、今後その活動ぶりを注視していきたいと考えています。

高体連登山競技会のその後

昨年の29号会報にて、報告した高体連登山競技会の赤ペンキ問題について、5月始めに関係者とお会いした。昨年の問題提起を受け今回は赤布を購入しルート表示を行ない、大会終了後には回収することでした。また生徒達に対しても自然保護教育を進めて行きたいとの前向きな回答があり、今後の展開を期待したいものです。

ところで、このような心無い行為は高体連に限ったことではなく、社会常識やルールを充分理解しているはずの社会人山岳会の一部にも散見されております。具体的には高山登山道の広範囲(5m以上)な刈払いや国立公園特別保護地区へ無許可の山スキールート表示杭の設置等々、社会問題化する子供達の非行を映し出す鏡のような行為にはあきれられるばかりです。子供達にも尊敬される大人として、規範を示すべく改善を願うところでもあります。なお、これに先立ち当会よりルート表示用ポール(赤布付き)を50本ほど贈呈したことを追記しておきます。

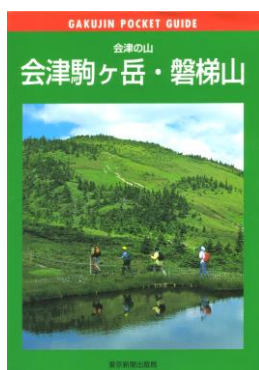
◆他会の観察会のご案内(参加する場合は必ず事前に連絡してください)

「福島県自然保護協会」

- ・郡山市子供の森生き物調査(郡山市) 7月17日(月)問い合わせTEL024-951-5920 曾根仁一さん
- ・観音沼自然観察会(下郷町)7月23日(日)問い合わせTEL0241-62-0626 山本恭士さん

「カタクリの会」 問い合わせいずれもTEL0197-82-3601 瀬川 強さん

- ・ブナの森の滝巡り(岩手県湯田町白糸の滝)7月16日(日)
- ・和賀川源流を訪ねよう(岩手県沢内村和賀川)8月20日(日)
- ・秀衡街道と秋の花(岩手県湯田町)9月10日(日)



奥田 博さん 「会津駒ヶ岳・磐梯山」を出版

本会報で「東北のブナ紀行」を担当している奥田博さん執筆による山岳ガイドが岳人ポケットガイドとして出版された。タイトルは「会津駒ヶ岳・磐梯山」であるが、飯豊連峰、吾妻連峰、那須連峰、飯森山を除く会津の山44山が紹介されている。「高山の原生林を守る会」会員ならではの山の生態系保護を重視した辛口のコラムは他の類書ではまずお目にかかれない。これからの登山のあり方を提起するガイドでもある。発行：東京新聞出版局 価格：1100円 体裁：A5版変形 136頁

吾妻・安達太良花紀行 8

佐藤 守

マルバキンレイカ (*Patrinia gibbosa* オミナエシ科オミナエシ属)

山地の岩場やがれ場に植生する多年草。秋の七草で有名なオミナエシの仲間であるが、開花期はオミナエシより早く、8 月上中旬頃である。花は筒状の黄色い合弁花で先端が 5 枚に分かれる。雄しべは 4 本。花の基部には「距」と呼ばれる突起があるのが特徴。里山に植生するオミナエシ、オトコエシには「距」はない。キンレイカは漢字で「金鈴花」と書く。高山に植生するコキンレイカ（ハクサンオミナエシ）にも「距」があるが、こちらとは葉の形が異なる。コキンレイカの葉は深い裂刻がありモミジに似ているが、マルバキンレイカは深い裂刻はなく粗い鋸歯で縁取られた丸みをおびた広葉である。葉のつき方は対生である。なおコキンレイカは飯豊連峰に植生するが、吾妻・安達太良・磐梯山では植生が確認されていない。また面白いことに新潟県以北に植生するとされているマルバキンレイカは、市販の図鑑類には殆ど記載されていない。私が知る限りでは、平凡社の図鑑のみである。吾妻連峰では、中腹辺りに群生地があるが、身近にこんな珍種が植生しているとは誰も気づいてはいないだろう。



ヤナギラン (*Epilobium angustifolium* アカバナ科アカバナ属)

高原の湿り気のある草地に植生する多年草。「ヤナギ」の仲間でもなく「ラン」の仲間でもない。しかし花はランのように艶やかである。また葉の形もさることながら、果実が絹毛を持ち風によって浮遊するところはヤナギに似ている。とても花が小さいアカバナの仲間とは思えないが、花びらの色は紛れもなくアカバナの様に涼しいピンクである。しかし赤い 4 枚のガクがこの花を華やかなイメージに仕立て上げている。ヤナギランの凝り性はこれに留まらない。花の咲き方も 3 日掛りなのである。まず開花初日には 8 本ある雄しべのうち 4 本が花粉を出し、2 日目に残りの雄しべが花粉を出す。しかし雌しべが柱頭を 4 裂して花粉を受け入れる態勢を整えるのは開花から 3 日目である。植物学者はこのヤナギランの開花習性を雄から雌へ性転換する植物と表した。この様な咲き方で花穂の下から上に向かって咲き続ける。これはマルハナバチやガが確実に受粉をしてくれることを狙ったヤナギランの用意周到な種の繁殖戦略でもある。



真夏の吾妻連峰中腹でこの花に初めて出会った私は、そんな用意周到な戦略があるとはつゆ知らず、ただただその美しさに感動していただけであるが、これもヤナギランの戦略が功を奏した証なのかは今のところ不明である。

東北ブナ紀行(4)

奥田 博

北海道の黒松内町の歌才という場所に北限のブナが自生しているといわれる。以前から行ってみたいと思っていたが、今年(2000年)の5月連休に、その機会があって訪れてみた。今回のみ「東北ブナ紀行」は海を超えて「北海道ブナ紀行」です。

7) 北海道・歌才

国道5号線から町道に入り、歌才が近付くとブナ特有のこんもりとした小山が見えてくる。案内板の立つ大きな駐車場が道路脇にあって、そこに車を置いて歩き始める。車がそこそこに止まっているので、訪問者は多いようだ。

沢に沿った道を登り始める。ミズナラやダケカンバの中を進むと、雪も現れる。少し急坂を登れば、トドマツの植林地に入る。今度は、次第に坂を下る。沢に架かる橋を渡るとブナ林に入って行く。ゆったりとした登りにかかり、道の脇にはカタクリやキクザキイチゲが遅い北海道の春を歌っていた。

そして白い肌のスラリとしたブナが現れた。平地のブナ、本土なら阿武隈山地のブナに似ている。しかしブナではない。寒さは厳しいのだろうが、積雪はそんなに多くはないのだろうか。大きなミズナラの木も見られる。道は最高点から、次第に下り気味の巻き道になってくる。この辺ではブナの森の持つ心地よいリズム感が伝わってくる。

太陽は次第に西に傾き、長い影を落とし始める。適当なところで、道を戻り、橋のところからブナセンターへと向かう道に入る。少しの登りで尾根に着くが、こちらにはブナはほとんど見られない。下るに従って次第に公園化してくる。このエリアには、公園に加えてビジターセンターや宿泊施設、日帰り温泉施設などがある。

歌才ブナビジターセンターに立ち寄って、北限のブナをレクチャーして帰途についた。今度は、葉の茂った季節に来てみたいと思った。

■コースタイム 駐車場(30分)→橋(30分)→ブナ行止り(30分)→橋(45分) 公園・歌才ビジターセンター



歌才のすらりとしたブナの木



歌才の白いブナ

8) 北海道・長万部

朝、車を走らせていると長万部岳と黒松内岳が並んで、立派に聳えていた。とても千石以下の山とは思えない。二股温泉の分岐を右に入ると、間もなく除雪は終って、ここから歩き出す。正面には、長万部岳が真白に眺められる。林道を3kmで長万部山岳会の山小屋「うすゆき山荘」に到着する。ここから噴火湾が望まれる。ここからはブナの林の中を歩くようになる。長万部山岳会の冬山道標があって、これを目標に登ってゆくの、気楽だ。次第に、周囲の山が見えてきて、素晴らしいブナの森が展開する。この森は、朝日連峰山麓のブナのように素晴らしい。北海道のブナ林ではなく、まるで東北のブナ林を歩いているような気分だ。林間は広くて、見通しも良く、長万部岳山頂から落ちる急峻な谷に、雪崩の跡までも望まれた。

看板の立つ山頂からは、太平洋と日本海を初め360度の大展望が楽しめる。北に見える太平山や狩場山、黒松内岳もブナに覆われた山であることが分かる。奥尻島にもブナが自生しているという。

下りは急斜面に加えて固いバーンで慎重に滑る。しかし瞬間に標高差200mを滑ってコルに到着。ここからは緩いブナ林帯となり、ゆったりと滑る。広い林間の気持ちの良い斜面を、穏やかに滑る気分は、何と表現したらいいのだろうか。ブナの再び急な斜面が現れるが、勿体無い斜面なので、コーヒータイムとする。最後の大斜面を滑れば、登山口の山小屋に到着してしまった。たったの25分の下りだった。あとは余韻を楽しむように、林道を下ったが、こちらもよく滑り、結局山頂から1時間余で車の所に着いてしまった。まさに会心の山であった。

■コースタイム 道路終点(1時間) うすゆき山荘(1時間) コル(45分) 山頂(スキーで35分) うすゆき山荘(スキーで15分) 道路



広い林間のブナ(長万部岳)

森の素敵な仲間たち 野鳥シリーズ VOL. 4 高橋 淳一

野山の緑が日に日に深みを増し、多くの命で満ち溢れる初夏の頃、東南アジアなど南方より渡って来た夏鳥たちの美しい鳴き声が響き渡るようになる。溪流沿いでは鳴き声が涼しさを一層引き立てているし、深い森の中で登山者の不安と緊張を和らげてくれる。また夏鳥たちの中には赤や青、黄色と鮮かな色彩の羽毛を持つ種類も多く、その容姿は「森のアイドル」と呼ぶにふさわしい。一方、この時期、かれらの主な生息場所である広葉樹の森に、奥山まで開設された林道を利用した素人山菜屋の爆竹や携帯ラジオの騒音が鳴り響くように成ってしまったことは残念である。今回はそんな夏鳥たちの中でも、特徴的な習性を持ち身近な存在であるカッコウの仲間「ツツドリ」そして美声の持ち主であり、鳴き声の聞き分けが比較的容易な「コルリ」を紹介する。

ツツドリ（筒鳥） ホトトギス目 ホトトギス科 「夏鳥」

例年6月も半ばを過ぎると、梅雨も本格化し、うっとうしい日々が続くようになるが、今年は比較的雨が少ないようだ。通勤途中の阿武隈川の岸辺では、ようやく終了した河川工事を待ちわびたようにオオヨシキリの忙しない声とともにカッコウのノスタルジックな鳴き声が聞かれるようになったが、時を同じくし、カッコウの仲間ツツドリも薄暗いブナ林の中、しとしと降る雨の日にポポ、ポポ、ポポと低音の鳴き声を発している。体長は30数cmでカッコウより僅かに小さいが、腹部の黒横斑が太い。しかしこれらの外見より見分けることはなかなか難しい。



ところでツツドリという名前の由来だが、ポポと連続する鳴き声が筒を叩いているように聞こえたためと言われているが、人影の少ない森の中で聞けば「なるほど」と肯ける。またツツドリをはじめとするカッコウの仲間たちは、他の鳥たちの巣に卵を産み付け、子育てをしてもらう「托卵」という習性を持つことがよく知られている。ちなみにカッコウはモズ・オオヨシキリ、ツツドリはウグイス、メジロなどに托卵する。そして同じ仲間のホトトギスは、時に、あの小さな鳥ミソサザイを対象にしてしまうと聞くと、自分の倍以上もある巣立ち前の幼鳥に給餌して姿を想像すると少しばかり心配になる。

コルリ（小瑠璃） スズメ目 ヒタキ科 「夏鳥」

多くの夏鳥がそうであるように、色彩豊かで美しい鳴き声を奏するのはたいてい雄である。体長14cm程のこの鳥も、白い腹部を除けば頭部から尾羽にかけて淡い青色の羽毛を持つのは雄で、雌はオリーブ褐色と目立たない。ただし、ヒタキ科の中では比較的足が長く水平な姿勢でとまることができるのは雌雄を問わず共通の特徴である。

主に亜高山帯で繁殖していると言われるが、私自身はブナ林でこの鳥の鳴き声を聞くことが多く、先月末に訪れた山形県の摩耶山でもチッチッチッ…と序序に大きくなる前奏のあとに、「馬のいななき」のようなコマドリに似たさえずりを大きなブナの枝先から披露してくれた。また何種類もの複雑なさえずりは、じっと聞き入っていても飽きさせることは無かった。



さて、この小瑠璃（コルリ）だが、光沢のある瑠璃色が美しい同じヒタキ科の大瑠璃（オオルリ）に比べ、見劣りする淡い色合いにより名付けられたものと思うが、「声良し、姿良し」とコマドリ、ウグイスなどとともに三名鳥に数えられ、密猟の対象とされるオオルリの悲運を思えば、幸いだったのかも知れない。

（原図 小学館・野鳥図鑑）

ブナの新緑観察会

観察会のルートは、1995年10月15日に行った第13回観察会と同じコース設定でした。前は秋真っ盛り、ブナの紅葉が素晴らしい季節でしたが、今回は新緑の季節、標高1400mのブナの森を目差しました。観察ルートは、吾妻修験盛んな頃の登拝ルートでもあります。唐松沢登山道入り口に、結界を示すとされる姥神石像があり、安全祈願をして出発



しました。半分落下した唐松沢の橋を渡り、先ずサワグルミなどの溪谷林を登る。すぐにスギの人工林に入り、これを抜けると再びミズナラやウダイカンバなどの二次林へ。これもすぐに終わり、その次がカラマツ人工林の長い登り。カラマツの急登をようやく終えるとやっとブナの巨木が現れる。これも伐採の残存木であり、さらに進んで今日の目的地である若いブナのコロニーに到着。というように、林相がめまぐるしく変わる登りでした。

林内には、クルマムグラ、ヒメアオキ、チゴユリ、ズダヤクシュ、タチツボスミレ、オオカメノキ、ハウチワカエデなどの花がひっそりと咲いていました。今年はブナも多数の花を着けており、秋にはブナの実が大豊作になりそうです。

◆次回観察会のお知らせ

第42回自然観察会 「西大巔清掃登山」

日時 8月27日(日) 8:30~15:00 1泊2日小舎泊まりを日帰りに変更します。

集合場所:五色沼自然教室前駐車場 集合時間:9:00 参加定員 30名

内容:デコ平スキー場から西大巔頂上を經由し、西吾妻小屋までの登山コースの清掃をします。

準備するもの:登山靴、ゴム長靴等、雨具、防寒具、帽子、軍手等、ゴミ袋、昼食

参加費用 保険代300円(当日)+ゴンドラ利用料1000円 申し込み 8月26日まで

第43回自然観察会 「高倉山周辺観察会」

日時 10月22日(日)8:00~15:00

(15日の予定でしたが東北自然保護集会在青森で開催のため変更します。)

集合場所:信陵公民館 集合時間:8:00 参加定員 30名

内容:穏やかな山容の吾妻連峰にあって独特の姿を見せる高倉山を訪ね、その成因などを探ります。

準備するもの:軽登山靴、長靴等、雨具、帽子、昼食、防寒具

参加費用 保険代300円(当日) 申し込み 10月21日まで

【編集後記】■中吾妻観察会でのトリガタハンショウズルの発見には、驚きました。この他にもオドリコソウなどこれまで会で確認していなかった植物が多く見られました。■夏真っ盛り、自分の体力を過信せず自然観察を楽しみたい。

「高山」高山の原生林を守る会会報 第33号 2000年7月発行

編集・発行 : 高山の原生林を守る会

代表連絡先 : 高橋淳一 Phone 024-593-1990(夜間7時~9時)

郵便振替 : 02170-0-24351 「高山の原生林を守る会」

入会方法 : 年会費(500円)を添えて上記まで

編集 : 奥田・佐藤・阿部・丸山